

8月9日「主よ、いのちのパンを裂き」Iコリント11:17~34

最後に行ったのは3月の第1週ですから、かれこれ5カ月。こんなに長い間、聖餐を行えない日が来るとは思いもしませんでした。役員会でもいろいろな方法を話し合いました。カトリックのように聖職者（プロテスタントの場合牧師）のみが行う（信徒は見ている）パターン。パンとぶどう液の代わりに個包装ドーナツとぶどう果汁ゼリーで行うパターン、など。結局、十分に安全が確保出来ない現状では、実施は難しいという結論に至りました。聖餐式は、キリスト教にとって洗礼と並んで最も大切な儀式の一つです。しかし、私たちの教会では月に1度、カトリックや聖公会では毎週と頻繁に与る儀式ですので、私たちには当たり前となり、その意味や大切さがいまいになっていたのかもしれない。今日、改めて、その意味を考えたいと願います。

さて、日本キリスト教団の聖餐式の式文では最初にこうあります。「その測ることのできない愛と恵みとを私たちの心に刻み付けるために、主は聖餐を制定されました」聖餐式というのはイエス様が「制定」された、と。実際にイエスが「わたしが十字架につけられたあと、こうなさい」と弟子たちに指示したとは考えられませんが、パンと杯を分かち合うこの儀式はイエス様と弟子たちの最も大切な記憶、それも2つの記憶から成り立っているは確かだと思います。

1つ目は、言わずと知れた最後の晩餐です。福音書にはたくさん食事のシーンが出てきます。古代の師と弟子の関係というのは、今のように講義室で一方的にしゃべる人とそれを受ける人という関係ではありません。集団生活を共にして、弟子たちは師の生活様式や、働きぶりなどを間近で見、一方的に教えられるのではなく、議論を交わしたりしながら学んでいったのです。ですから当然食事と一緒に取りますし、弟子にとって食事の席は最も会話が弾む学びの場だったでしょう。これは私の勝手な自説ですが、イエスの言葉として私たちのところに伝えられていることのほとんどはこの一緒に食事をしているときに語られたことだったのではないかと考えています。たとえば「あなたがたは地の塩である。あなたがたは世の光である」とかはテーブルの塩や燭台を指しながら言ったんじゃないかと。

私自身の経験から言っても、神学生、伝道師として5年間、神戸聖愛教会の小栗献牧師に学びましたが、先生の説教はほとんど覚えていませんが（これは叱られるかも）、食事の席で言われたことなどは結構覚えています。宗教改革者のルターにも有名な語録が残っていますが、そのほとんどはルターと弟子たちが食事をしているときにルターが語ったことを弟子たちが書き留めていて出版したのだそうです。「私がここに座ってうまいビールを飲む、するとひとりでに神の国はやってくる」「酒と女と歌を愛さぬものは生涯、馬鹿で終わる」etc

そんな中でも、特別、弟子たちの心に残ったのが最後の晩餐でした。どうやらイエス様はご自身の命が狙われていることに気付いていたようで、ユダによって裏切られ、捕らえられる最後の夜に特に親しい弟子たちだけを集めて食事をされました。そして、この食事をよく覚えておくようにと言われたのです。今日のパウロの手紙にもこんな風にありました。「わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、『これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい』と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、『この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい』と言われました。」この食事は弟子たちに強烈なインパクトを残したようです。そりゃそうですよね。いわばイエス様の遺言は「食事」だったのです。この食事がイエス様を思い出す最も大切な儀式となりました。

2つ目は、ガリラヤ湖のほとりで5千人もの人たちとパンを分け合った出来事です。イエス様は親しい弟子たちだけに限らず、色んな人たちと一緒に食卓を囲んだようです。それも、普通の人が食事を一緒にすることを拒んだ徴税人などの罪人と。イエス様が敵対する者たちから言われた悪口です。マタイ 11:18~19「ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると（荒れ野で清貧の生活を送った）、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。」日本にも「同じ釜の飯を食った仲間」という言

葉がありますが、古今東西どのような文化でも食事を一緒にするというの
は、親しさを表します。そうすることによってイエス様は色んな人の「隣
人」となられたのではないのでしょうか。

その最たるものが、5千人の給食です。イエス様のうわさを聞きつけて
やってきた大勢の人たちにイエス様は御言葉を語り、病気を癒されました。
そんなことをして過ごしているうちに、日が暮れそうになったのです。弟
子たちは追い返そうとしましたが、イエス様は追い返してはならないと弟
子たちを叱られます。きっと中には帰っても食べる者もない貧しい人たち
もいたことでしょう。一緒に過ごす人のいない孤独な人もいたでしょう。
障害のある人も、差別をされている人も、異邦人や罪人もいたかもしれま
せん。そんなお腹を空かせた何千人もの人たちとイエス様は食べ物を分か
ち合いました。どうやったか分かりませんが、みんなが「満足した」と聖
書には書かれています。それも弟子たちにとって本当に大きな出来事でし
た。

ですから、聖餐式では2つのことが大切にされます。一つはイエス様の
弟子としてその教えを心に刻み付けること、もう一つは食べ物を分かちあ
うことです。特に今日のパウロの手紙では分かちあいが問題とされていま
した。そもそも、最初の教会では礼拝と食事会の垣根があいまいだったか
もしれません。礼拝が食事だし、食事が礼拝です。それは、ユダヤ教の過
ぎ越しの祭りなども、食事と礼拝が一緒になっていることから分かります。
教会ではお金持ちも貧しい人も集まってくる人みんなで食事を分け合っ
ていたのです。それは今日の食事もあるかないかの暮らしをしていた最も
貧しい人などには本当の命の糧となったでしょう。ところが、その教会で
の食事が、コリントの教会では人々を分断し、争いのきっかけとなってい
たのです。「なぜなら、食事のとき各自が勝手に自分の分を食べてしまい、
空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいるという始末だからです。
あなたがたには、飲んだり食べたりする家がないのですか。それとも、神
の教会を見くぶり、貧しい人々に恥をかかせようというのですか。」経済的
に余裕があって、裕福な人は礼拝の時間にも余裕をもって集まれます。そ
して、先に礼拝（食事）を始めてしまっています。そして、貧しい、遅く

まで働かなければならない人たちがやっとの思いで教会に集まった時には酔っ払いと空になった食事の席だけが残っているという状態だったのです。パウロはその聖餐はおかしいと訴えたのです。教会で行う食事は単なる宴会ではありません。神の恵みを皆で「分かち合う」ことなのです。27節「ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すこととなります」との言葉はよく洗礼を受けなくて聖餐に与ってはならない、という文脈で用いられますが、それは間違いです。ここで言われているのは、恵みを分かちあうことなく行われる聖餐は、教会の食事としてふさわしくないという趣旨のことがいわれているのです。

さて、今日は聖餐式について改めて考えています。言うまでもなく、私たちキリスト者にとって最も身近で最も大切な儀式です。再開を待ちわびている方も多いことでしょう。けれどもその前に考えたいと思います。聖餐式に現されているのは、愛と恵みを分かち合う精神です。私たちがこの食事を通して、愛へと導かれなければ、ただのお食事会になってしまうのです。私はコロナ禍によって聖餐に与れない期間、与れないからこそ聖餐について考える期間にすべきではないかと思っています。その意味で、一つ興味深い出来事があります。このコロナ禍のなかで礼拝がインターネットの配信に切り替わり、聖餐式に与れない人が多数表れたときに都市部では聖餐を求めて各地の教会をさまよって歩く信徒たちが現れたのです。皆さんはどう思われるでしょうか？カトリック教会の小西司祭はこのように語っておられます。「彼らにとって、ご聖体に現存するキリストを頂くことだけが信仰の主要な目的だったのかと思うと、集いの中での交わりがないがしろにされたようで残念です」（雑誌『ミニストリー vol145』カトリックの方と、私たちではずいぶん聖餐についての捉え方が異なっていますので一概には言えませんが、私にも聖餐に「与ること」が目的になり、そのことによって私たちが愛へと押し出されるという本来の意味が見失われている出来事に思えてなりません。

また、先日の聖書研究祈祷会では、日本の食糧事情についての話が出ました。私たちの食生活は本当に豊かですが、その陰で食料生産者は年々減

り続けています。その原因は生産物があまりに安く買ったたかれ、農業が収益にならないからだそうです。私たちの豊かさの陰で、その生産者の方々が割を食っているのです。「フェアトレード」という言葉もありますが、この現実日本だけではないでしょう。また、このコロナ禍により経済的に困窮し食べるに窮する人たちが大勢いることも忘れてはなりません。さらには、日本で子どもたちの貧困が広がっていて、食べられない子どもたちが増えているとも言われています。コロナで頓挫していますが、子ども食堂を教会で行うことはかねてからの私の念願です。私たちはこの聖餐に与れない期間に、改めて食べられない痛みや苦しみや悲しみを少しでも共有したいと思うのです。

そして何より私たちは御言葉によって養われていることを忘れてはなりません「人はパンのみに生きるにあらず」というイエスの言葉を改めて心に留めたいと思います。私たちがもう一度、聖餐に与る日、その日が本当に「いのちのパンを裂く日」に変わることを願います。